

〈報告〉

# 高校生価値意識調査 2014

## シェアハウス型コミュニティ世代

リーマンショックとアベノミクスを経て生まれたバランス型価値意識

牧田綾子 リクルート進学総研研究員

リクルート進学総研では、2007年から、高校生の価値観、将来観、ライフデザインなどを聞く、高校生価値意識調査を実施している。今年度は2014年3月時点で高校1～3年生だった進学希望者を対象に、インターネットを通じて4月に調査を行い、1438名から回答を得た。

今年度調査の結果を述べる前に、まず、2007年から前回調査(2012年)までの、高校生の価値意識の変遷について振り返ってみたい。

### 景気悪化・社会不安で「夢」から「安定・保証」へ

初回の調査を実施した2007年時点の高校生は非常に特徴的な世代だったといえる。

日本では、2004年に文部科学省が「キャリア教育の推進に関する総合的調査研究協力者会議報告書」でキャリア教育の推進を提言し、小中高等学校においてキャリア教育が広まった。つまり、2007年時点の高校生は、キャ

リア教育を受け、将来の生き方・働き方を考えてきた最初の世代といえるだろう。

一方、2002年度から実施されたいわゆる「ゆとり教育」を小中で受けた世代。折しも、SMAPの『世界に一つだけの花』がヒットしたのが2003年。まさに「ナンバーワンでなくオンリーワン」の世代だといえる。

キャリア教育で「君の将来の夢は何か」「どんな職業に就きたいのか」を日々問われ続けてきた彼らの価値観

は、「夢の価値、暴騰」(図表1)。自分のやりたいことや夢を持ち、それに向かって努力することが重要なのだという考えであり、「夢がないと、進学先は選べない」という声が多く聞かれた。

そんな彼らの「夢志向」を大きく揺るがしたのが、2008年のリーマンショックだ。2009年の調査では、価値観が一転して「身の丈志向」に。不況の中、「夢を探している場合ではない」状態になったのである。好きなことを仕事にして人並みに生きる、ということに関心が移行していった。

そして景気は悪化の一途をたどり、2011年には東日本大震災が発生。経済的な観点のみならず、社会的にも「この先何が起るかわからない」という不安が増大。また、後述するが、自分たちの弱みとして「ゆとり教育」を自覚している彼らは、社会不安に対して「安定・保証」つまり資格を取り、安定した職業に就くという「他人軸を重視」することで、社会不安を生き抜く武器にしたいと考えたのである。

### 2014年のキーワードは「バランス」

そして2014年、彼らの価値感に2つの変化が大きな影響を与えている。

一つは景気回復の兆し、そしてもう一つは「ゆとり教育」の終焉である。経済的にも好転の希望を持ち、「弱み」としてのゆとり教育から解放された彼らの中で、リーマンショック以降影をひそめていた「自分の夢」が回復の兆しを見せた。しかし、依然として「安定・保証」も重視する考え方も残り、どちらかにこだわるのではなく双方の“バランス”が重要だという価値観に至ったのである。

また、コミュニケーションのあり方にも大きな特徴がある。SNS世代の彼らは「LINE」「Twitter」などのオンライン上で常に他者とつながっているため、身近な人間関係を非常に重視する。また、他者の情報や意見に対する受容性が高く、関係性をうまく維持しながら、自分の思いとの“バランス”

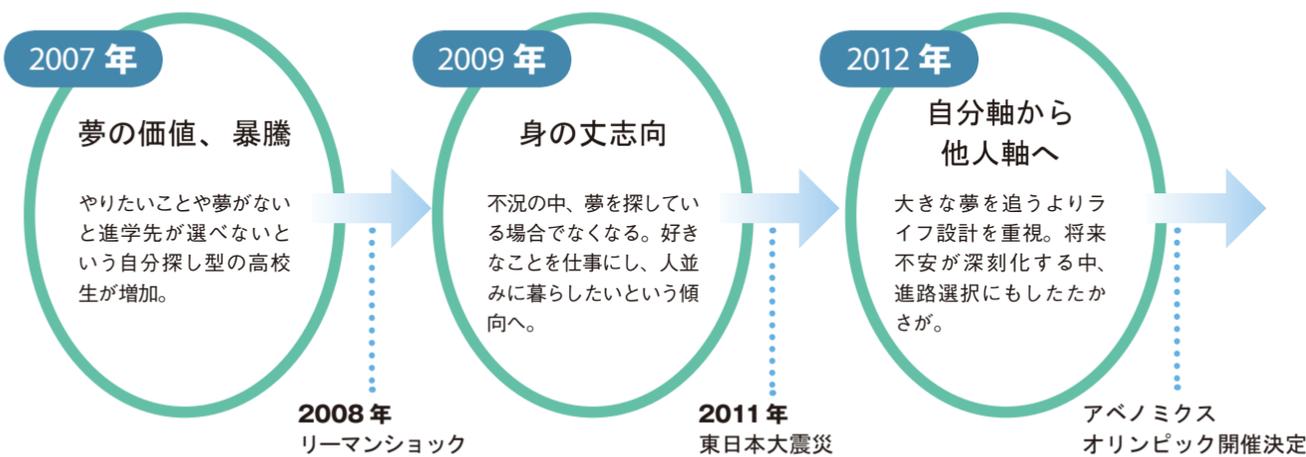
を取って行動することが得意な世代である。一方で、主体性や実行力といった、自発的にアクションする力は弱いと自覚もしている。

### シェアハウス型コミュニティ世代とは

今、若者の間でシェアハウスがブームだ。シェアハウスでの人間関係をドキュメントしたテレビ番組『テラスハウス』が注目され、若者に人気のアーティスト「SEKAI NO OWARI」のメンバーは全員同じ家に同居。そのライフスタイルは若者の憧れとなっている。なぜ今、シェアハウスなのか。前述したように、彼らは身近で小さな人間関係を大切に。何をやるかではなくて誰とするかが重要である。自分も尊重されたいが、他人も尊重する。「自己」と「他者」の心地よいバランスが存在する場所、それが「シェアハウス」なのだ。

以下、今回の調査で見えてきた、シェアハウス型コミュニティ世代の詳細を見ていく。

図表1 高校生の価値意識の変遷



### 2014年 シェアハウス型コミュニティ世代

リーマンショック／3・11／アベノミクスを経て生まれた、バランス型価値意識

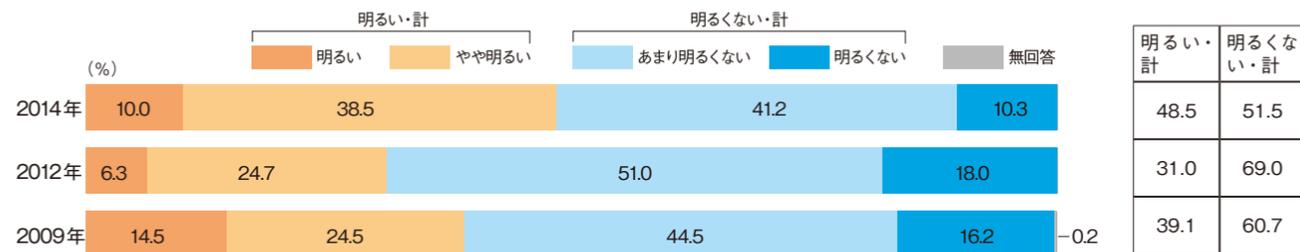
- 他者と生活を共にするが、個人の空間も存在する「シェアハウス」のように、身近な他者の情報や意見を受容し、関係性を構築しながら、自分の思いとのバランスをとって意思決定する世代。

- ・景気回復への期待感から、将来観は回復傾向。
- ・現状の生活に幸福を感じており、特に不をもたない。
- ・将来については、「自分の夢」と、「安定・保証」のバランスを重視。
- ・家族や友達、先輩など、身近なコミュニティの中で意思決定。
- ・他者の意見や情報への受容性が高く、チームワークには自信を持つ。
- ・一方で、主体性や実行力といった「前に踏み出す力」「考え抜く力」は弱いと捉えている。

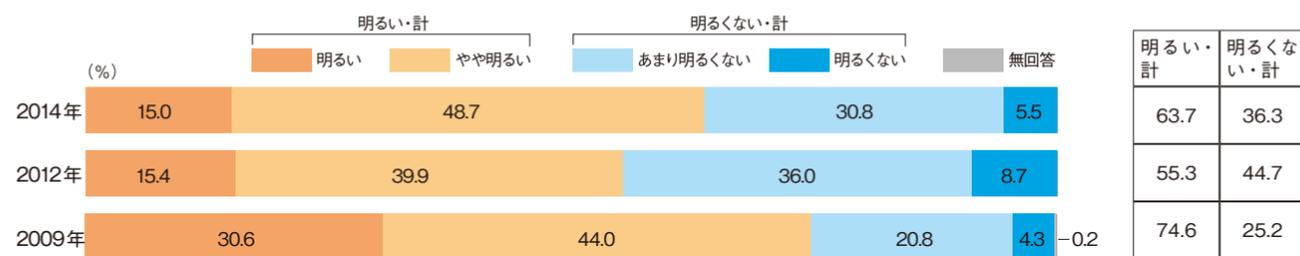
#### 【背景】



図表2 社会人になるころの将来の明るさ



図表3 自分自身の将来の明るさ



図表4 高校生が考える自分たちの世代の強みと弱み (複数回答)

自分たちの世代ならではの「強み」				
順位	強み	2014年 %	2012年 %	
1	インターネット・ネット	4.3	3.3	
2	IT・情報化社会	4.2	7.2	
3	パソコン・携帯電話・デジタル・電子機器	3.3	4.6	
4	発想力・独創性	2.7	2.2	
5	若さ	2.4	5.4	
6	脱ゆとり教育・新学習指導要領	2.3	*	
7	柔軟性	2.0	2.3	
8	協力・協調性	1.9	0.4	
	ゆとり教育・ゆとり教育世代	1.9	1.5	
10	情報の収集力・伝達力	1.8	0.9	

自分たちの世代ならではの「弱み」				
順位	弱み	2014年 %	2012年 %	
1	ゆとり・ゆとり教育・ゆとり教育世代	22.4	25.0	
2	精神的な弱さ・根性がない・ストレスに弱い	4.7	2.7	
3	学力・学習不足・知識不足・頭が悪い	4.5	8.6	
4	諦めやすい・我慢できない・忍耐力	3.9	3.5	
5	コミュニケーション・会話が下手	3.2	2.8	
6	社会的評価(認められない・馬鹿にされる)	2.5	2.2	
	打たれ弱い	2.3	3.4	
7	言われた事しかやらない・指示待ち・自主性や主体性がない	2.3	0.3	
	人間関係・友達付き合いが下手	2.3	0.9	
10	常識がない・ルールを守らない	2.0	1.8	

※「脱ゆとり教育・新学習指導要領」：2012年の回答はなし

### 未来展望は回復の兆し

自分たちが社会人になるころの将来の明るさを聞いたところ(図表2)、「明るい」と答えた割合が2014年に大きく上昇した。(2012年 31%→2014年 49%)。全体的にみると、未だ「明るくない」が「明るい」を若干上回るものの、前向きに捉える高校生が増加。その理由として、アベノミクスと2020年のオリ

ピックの影響が多数挙げられており、景気回復への期待が高まっている。一方、自分の将来に対しても(図表3)、「明るい」と考える高校生が増加(2012年 55%→2014年 64%)。社会に対しても自分にとっても、将来への期待の兆しが覗く結果となった。

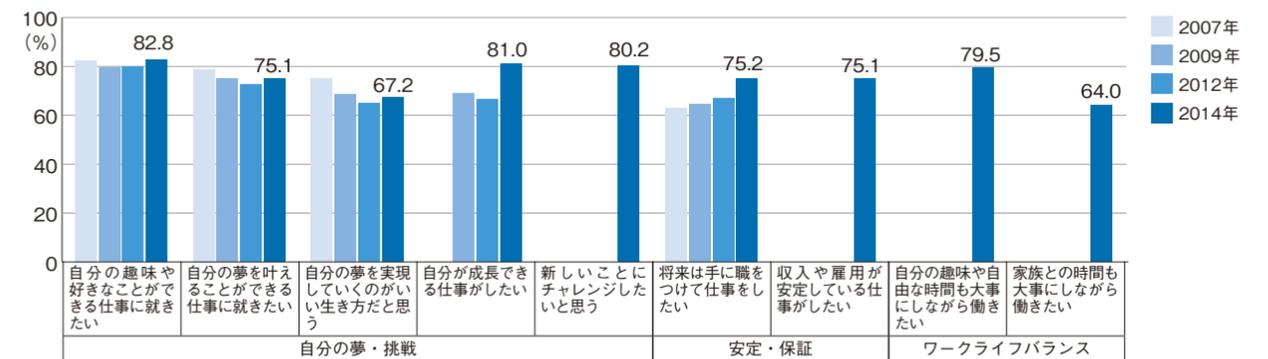
### ITスキルへの自信、脱ゆとりへの移行

自分たちの世代の強みは(図表4)、

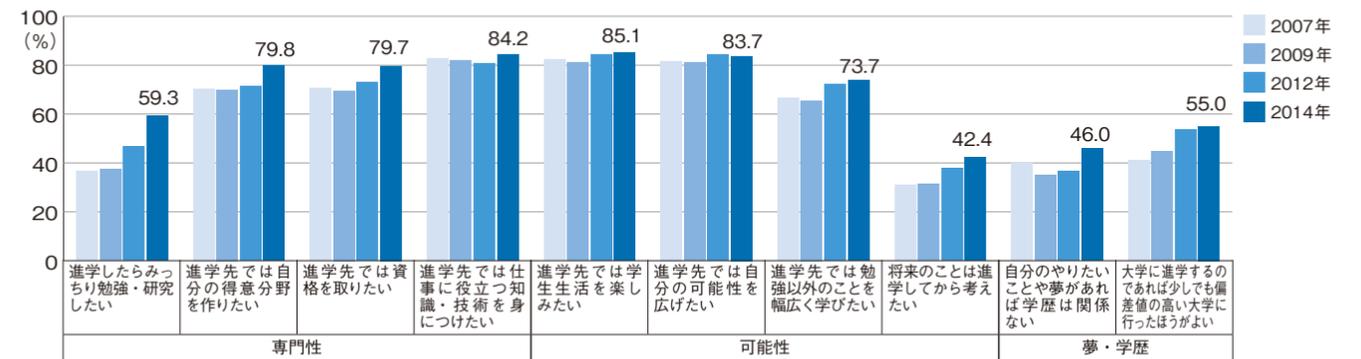
ITスキルが上位に。スマートフォン所有率が8割を超える彼らは、小学校低学年でmixi、GREEのサービス開始を経験したSNS世代。「スマホを通じた情報収集や発信力は高い」「SNSの中でコミュニケーションするのは慣れている」などの声があった。

一方、弱みのトップは前回に引き続き「ゆとり教育」だったが、強みの6位には「脱ゆとり教育」が入っている。小中は「ゆとり教育」だったが、高校では新

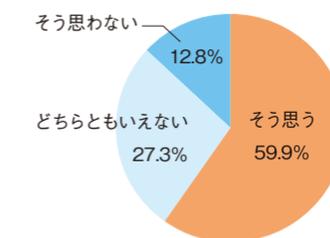
図表5 将来の仕事やキャリアに対する考え(「そう思う」と回答した割合)



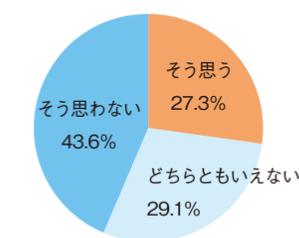
図表6 進学に対する考え(「そう思う」と回答した割合)



図表7 【女子】将来、結婚・出産しても働き続けたい



図表8 【女子】将来、専業主婦になりたい



図表9 【女子】結婚しても働き続けたい理由(複数回答)(%)

1位	仕事にやりがいを感じられそうだから	54.3
2位	経済的に自立しておきたいから	50.6
3位	夫婦どちらかの収入だけでは生活することが難そうだから	44.8
4位	家庭だけでなく、社会とのつながりを持ち続けたいから	40.3
5位	自分で自由に使えるお小遣いがほしいから	40.0

学習指導要領を学ぶ「脱ゆとり世代」。狭間世代の不安もありながら、「新教育課程の最初の世代だから、基礎学力は高いと思う」と、前向きに捉えている声も聞かれた。

### 「自分の夢」と「安定・保証」のバランス

将来展望の回復に伴い、自分のやりたいことや夢を持ち、実現すること、新しいことへのチャレンジ意欲が、2012

年を底に上昇(図表5)。しかし、そこは不況時代に育った高校生。将来は手に職をつけて、収入や雇用が保証された仕事に就き、安定した生活を手に入れたいという思いも高くなっている。進学先でも、みっちり勉強したい、得意分野を作りたいと、明確な目的を持つ意向が高まった(図表6)。進学先への期待として、可能性の項目より専門性の項目の伸びが目立つ。

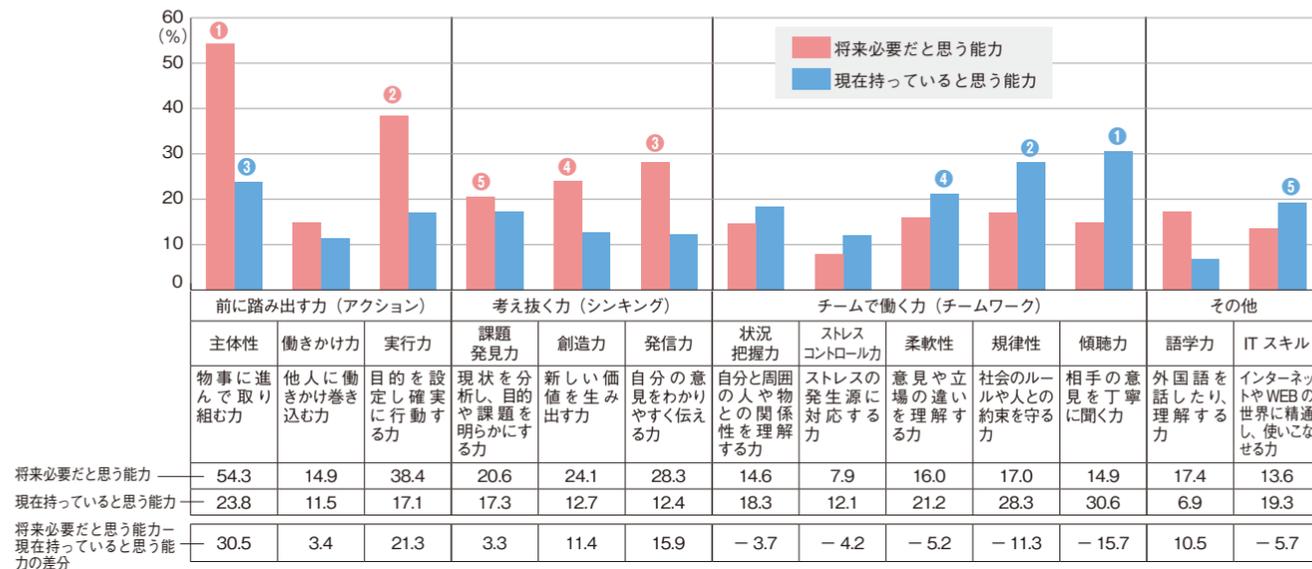
彼らは、ワークライフバランスも重

視。自分の時間や家族と過ごす時間も大切にしている。「夢」と「安定・保証」。「仕事」と「プライベート」。どちらかに偏るのではなく、変わりゆく環境に合わせて、どう変化させ、バランスを取っていくかが重要なのだ。

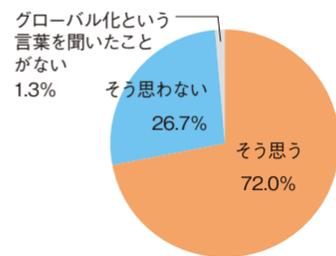
### 女子高生のキャリア志向

結婚・出産後も働きたいと考える女子高生は約6割と、専業主婦志向を持

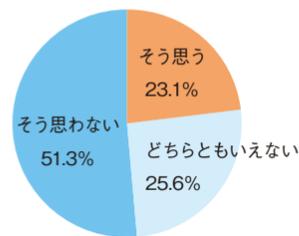
図表 10 将来社会で働くに当たり、必要だと思う能力と現在持っていると思う能力  
(必要な能力は上位3つまで、持っている能力は全てを選択しているため、差分は参考値)



図表 11 グローバル化は自分に  
関係がある



図表 12 将来海外で働きたい



つ女子高生の2倍に(図表7・8)。その理由も、「仕事のやりがい」「経済的事情」を上回った(図表9)。その背景としては2点ある。

一つは、小学校の頃からキャリア教育を受け、将来の生き方・働き方を考えてきたこと、もう一つは、彼らが生まれた時期に、日本の社会で共働き世帯が専業主婦世帯を上回り、「働く母親」を身近に見てきたことが、将来観に影響を与えていると考えられる。

一方、男子では、結婚相手に結婚・出産後も働いてほしいと考えているのは約3割と少数派。どちらともいえない

いが約半数で、よくわからない、あまり考えていないというのが実情のようだ。

**強みはチームワーク、弱みはアクション**

経産省が定義する『社会人基礎力』の項目に合わせて、「将来必要とされる能力」と「現在持っている能力」を聞き、その差を見たところ(図表10)、持っている力で高かったのは、「傾聴力」や「規律性」などの、「チームで働く力」に関する項目であった。

一方、必要とされているが持って

いない力は「主体性」や「実行力」などの「前に踏み出す力」「考え抜く力」に関する項目だった。

SNSなどオンライン上のネットワークの中で生きてきた高校生は、規律を重視し、他人との意見・関係にバランスを取りながらも、自ら創造的に考えて、行動する実行力に欠けると自分たちの能力を分析している。

**グローバルへの意識は内向き志向**

急速に進むグローバル化の波を、高校生も感じ取っている。72%の高

図表 13 海外で働きたい理由 (複数回答) (%)

1位	日本以外の世界を知りたいから	53.5
2位	語学力を鍛えたい・生かしたいから	53.2
3位	国際的な仕事がしたいから	49.6
4位	外国人と一緒に仕事がしたいから	42.4
5位	最新の知識や技術が身に付く環境で働きたいから	26.5

図表 14 海外で働きたいと思わない理由 (複数回答) (%)

1位	語学力に自信がないから	61.5
2位	日本が好きだから	61.3
3位	海外の治安に不安があるから	48.1
4位	外国人と働くのが大変そうだから	25.1
5位	家族や友人と離れたくないから	20.4

図表 15 高校生の進学意識別7タイプ

5つの因子反応から7タイプに

1400人の高校生に、将来や進学に関する質問をした結果、5つの因子が抽出されました。その因子への反応をもとに、高校生を8つのタイプに分類しています。

●重視項目因子

- 学生生活謳歌型因子 勉強以外の学びや学生生活、可能性の広がりを重視
- まじめ勉強型因子 学問や研究を充実させることや得意分野をすることを重視
- 地位上昇志向型因子 大きな成功、有名企業への就職、出世や富などステータスを重視
- 夢・興味を仕事に型因子 夢をかなえる、好きなことや趣味を仕事にすることを重視
- ほどほど生活型因子 高望みせず、そこそこ楽しい生活ができることを重視

**Type 1**  
自分探しタイプ

将来のことは先延ばし。8割弱が大学・短大に進学、「入ってから夢を見つけたい」と考える。偏差値や入試方法の基準しか持たないので、学校側の「なぜよいか」というレコメンドを期待。

**Type 2**  
ブランド重視タイプ

今の目標は少しでも偏差値の高い大学に行くこと。有名企業に入り、出世することが幸せな生活の基盤になると考えている。流行に敏感で、進学情報の収集も活発。

**Type 3**  
学者タイプ

進学したらコツコツ勉強して知識や技術を身につけ、将来の厳しい競争社会を生き残りたいと考える堅い。小規模で居心地のよい雰囲気、勉強以外も幅広く学びたいと考えている。

**Type 4**  
おっとりタイプ

競争が苦手、上昇志向は低め。家族など身近な人たちの大事にしており、地元志向も強い。小規模で居心地のよい雰囲気、勉強以外も幅広く学びたいと考えている。

**Type 5**  
プロ突進タイプ

なりた職業が明確。夢実現のための努力を厭わず、将来の成功を切望。ネットワークも広く、志望業界で働いている先輩からリアルな情報を手に入れ、進学先選びの参考にする情熱がある。

**Type 6**  
好きエンジョイタイプ

将来会社に入ったりに興味なく、今「好きなこと」を手がかりに進学先を考える。ただし、自由な環境に苦手で、交友関係が広い。

**Type 7**  
未成熟タイプ

将来の夢も、進学先へのこだわりもなく、「入ればどこでもいい」という感覚で進学する。自宅に届く進学情報誌など受け身でも触れられる情報に影響される。

とりえず大学に行って自分の可能性を広げたい  
偏差値の高い学校に入って有名企業に就職したい  
コツコツ勉強して得意分野を作りその道の専門家に  
勉強も遊びもバランスよく。高望みせず自分の世界を大切に  
なりた職業へ一直線。自力で道を切り開き成功したい  
がつつせずマイペースで好きなことを続けたい  
夢はなく勉強は嫌い。今、楽しければOK

図表 16 大学進学希望者のタイプ構成比の変化



\*全体傾向の把握のため、上記の7タイプに加えて「就職タイプ」(=就職希望者)を追記している。  
※2007年はFAX調査/2009年は郵送調査のため「無回答」が出現する。

校生が、グローバル化は自分に関係があると認識している(図表11)。

しかし、実際に将来、海外で働きたいと考える高校生は23%にとどまり(図表12)、働きたくないと考える高校生の半数以下。働きたい理由としては、日本以外の世界を知りたい、語学力を鍛えたいという声。一方、働きたいと思わない理由のトップは語学力への不安。次いで僅差で日本が好きだからという理由が挙がっている(図表13・14)。語学への自信のなさが、海外へ飛び出すハードルとなっている。

**大学は「可能性探し」から「専門性を身につける」場へ**

本調査では、将来や進学に関する質問から5つの因子を分析し、その反応をもとに高校生を8つのタイプに分類している(図表15)。2007年から、大学進学希望者のタイプ構成比の変化をみると(図表16)、2007年には16%しか存在しなかった「プロ突進タイプ」が今年は26%に増加した(これは専門学校と同じ割合)。2007年には「自分探し」が3割弱と、「やりたいこと探し・可能性発見」の場であった大学。図表6とも

合わせ、不況が続いた今、目的を持って、将来に対し専門性を磨く場へと変化しているのである。

自分の意志と安定のバランスを重視し、身近な人間関係の中で居心地良く生きる高校生。彼らに響くコミュニケーションとして、ビジョンを一方的に伝える「コンサルティング的」なコミュニケーションではなく、彼らの今と進学先、未来を対話によって丁寧に紐ぎ、その先のコミュニティまでイメージができるような「カウンセリング的」コミュニケーションが必要となってくるだろう。